九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高麗陶器の生産と消費の研究

主税, 英徳

https://hdl.handle.net/2324/7182247

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	主税　英徳
論　文　名	高麗陶器の生産と消費の研究
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　宮本　一夫 副　査　九州大学　教授　森平　雅彦 副　査　九州大学　准教授　辻田　淳一郎 副　査　九州大学　准教授　荒木　和憲

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

上記の論文は、9 世紀から 14 世紀という統一新羅時代末期から高麗時代の陶器の編年と、編年に基づく器種構成や窯構造の変遷すなわち高麗陶器の生産ならびにその消費の実態を解明した論考である。そこでは、単に、高麗陶器の変遷を明らかにしただけでなく、同時期に出現する高麗青磁や高麗白磁の変遷や生産との関係、さらには高麗の歴史的な文脈との関係のなかで、高麗陶器の生産と流通を解釈したことが、秀逸な点として評価できる。

第１章は、韓国と日本における高麗陶器の研究史を整理し、本論で解決すべき課題を提示し、研究対象資料と分析方法を示した。

第２章では、高麗陶器の器種分類を行い、このうち大型壺を対象として、属性分析を基に編年を行っている。さらに、大型壺の各型式と紀年銘資料や日本出土資料などをもとに、実年代を推定し、5 期区分を設定した。この大型壺の編年を基に、器種構成の時期的変遷について分析し、長期的に生産される器種、消滅する器種、新たに生産される器種があることを明らかにした。

第３章では、生産様相を示す窯構造を分析し、12 世紀には、窯後方部に「排煙関連施設」が付設されることや、特定器種の生産に特化した窯が出現することを明らかにした。このことから、12 世紀が高麗陶器生産の画期であることを指摘している。このほか、窯構造において、楊広道・慶尚道・全羅道における地域差がみられることを示した。また、朝鮮時代甕器窯と高麗陶器窯には、構造上大きな差があることを示している。

第４章では、消費様相を解明するために、大型壺を対象に分析した。大型壺は 12 世紀には小型化する傾向がみられ、大型壺の用途が拡大するように、この時期に消費においても画期がある可能性を示した。

第５章では、日本出土の高麗陶器を対象とし、消費様相の一端を解明した。その結果、その分布は北部九州を中心としながら、琉球列島まで点的に出土が確認できるとした。また、器種は大型壺と盤口瓶・壺が主体であり、時期的には 12 世紀が最も多いことなどを明らかにしている。

第６章では、これまでの生産と流通の分析結果をまとめることにより、高麗陶器の生産と消費における画期が、12 世紀であることを示した。また、この画期時期には、高麗青磁においても翡色青磁が完成し、高麗青磁窯も全国的に分布するなど、高麗青磁が活況をみせる時期である。一方で、高麗白磁は 12 世紀前後に生産量が減少し、質が低下している。

このように、高麗陶器の生産様相や消費様相における 12 世紀の画期を以て、高麗陶器の需要の高まりがみられ、新たな窯構造の導入や新器種の製作など、生産の向上がみられることを示した。終章では、このような 12・13 世紀を、中世東北アジア陶磁史における「中世的高麗陶器様式」の成立期

として捉えた。

以上のように、本論は、高麗陶器の詳細な型式分類と型式学的な編年を基に、生産地である窯と消費地である遺跡出土の高麗陶器の分析を行い、高麗陶器を中世東北アジア陶磁史上に位置づけた初めての体系的な論考である。

以上から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認めるものである。